



地域に伝えられる伝承をいかに受け止めるのか： ”津波てんでんこ”をめぐって

遠州，尋美

(Citation)

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 12:43-45

(Issue Date)

2014-02-02

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005453>



地域に伝えられる伝承をいかに受け止めるのか
”津波てんでんこ”をめぐって

大阪経済大学地域活性化支援センター長
経済学部・教授 遠州 尋美

■釜石の奇跡

- 東日本大震災の津波被災地であって、人々の生死をわけたものは、避難行動のあり方
- 特に重要な経験が「釜石の奇跡」
人口4万人の小都市釜石市で、1000を超える犠牲者
しかし、小中学校の児童生徒3000人のほぼ全員が津波を逃れ、命を守り抜いた

■釜石の奇跡を生んだ防災教育

- 「釜石の奇跡」を導いた津波防災教育
 - 群馬大学大学院の片田敏孝教授の働きかけ
 - モデル校での実験的取り組みを経て、2008年度から全小中学校で防災教育
 - 大人の命をも守った子どもたちの避難行動
親がいない家に帰宅していた低学年の児童が親の帰りを待つことなく自主避難、あるいは渋る親や祖父母をせき立てて避難
釜石東中の子どもたちは、校庭にいたサッカー部員を先頭に、鶴住居小学校の児童の手を引き、周辺の大人たちを巻き込んで、高台の避難所まで1.6kmを避難
- 「奇跡」というのはおかしい。普段からやっていたことを実践した結果だから”実績”というべきだ」
(NHKEテレのドキュメンタリーでインタビューに応えた子どもたち)

■災害対策と地域の伝承－「津波てんでんこ」と「これより下に家を建てるな」

- 釜石市の防災教育の目標
 - 誰にも頼らず自らの判断で避難行動をとることのできる主体性を育む
 - 常に津波に備えて生き抜くことのできる災害文化を定着すること
- 過去の災害経験を伝える災害遺産や伝承を学ぶことが柱の一つ
中でも重視されたのが「津波てんでんこ」
＝ 子どもたちの避難行動は「津波てんでんこ」を実践
→ ”釜石の奇跡”が知られて以後、マスコミなどが喧伝
- 「これより下に家を建てるな」
宮古市重茂姉吉地区に建つ石碑に刻まれた碑文
＝ 菅首相が4月1日の年度はじめの所信表明演説で「高台移転」を打ち上げたことからマスコミも注目

■災害経験に学ぶ災害対策

- 災害対策は過去の災害経験に学ぶことから

= 被災の既往最大値をもとに被災想定を行い，それに備える対策をとる
三陸沿岸の各都市の災害対策は，明治三陸津波または昭和三陸津波のいずれかが基礎
しかし，東日本大震災のあとの「先人の知恵」の喧伝の仕方そのまま肯定できない

■伝承を鵜呑みにする落とし穴

◇封建支配のイデオロギー色濃く反映した「津波てんでんこ」

- 「津波てんでんこ」=地元の人々伝承は「命てんでんこ」
親や子への思いを断ち切って自分が生き延びるために心を鬼にせよ
= 飢饉など人々の存亡を脅かすあらゆる出来事に共通した教え
封建時代，限られた資源・技術の制約と過酷な身分制支配にがんじがらめにされたなかで，個人よりも，家，一族の存続を優先
= 封建イデオロギーを体現
- 歴史的事実は，単なる事実ではなく，その時々々の自然条件や社会的・技術的条件のもとで人々のくらしと営みを反映
結果として残された事実を普遍的な真理と見なせない
= 「親を見捨てろ，子を見捨てろ」が津波に対応する最善の道であるはずがない

◇漁村の居住文化から眼を反らせる「これより下に家を建てるな」

- 「これより下に家を建てるな」
 - 津波の被害を繰り返し経験した人々が，海辺での居住を放棄して高所に定住の場を求め，その思いを後世に託そうとしたことは，敬意を払って受け止めるべきこと
 - 度重なる津波被災にも関わらず，あえて海辺に住居を構え集落が築かれてきたことにも，十分な理由
 - ◇ 災害の危険があっても海とともに生きるくらしが，漁業を育み私たちの毎日の食卓を支えてきた
 - ◇ 漁村の居住空間と集落景観は，世代を重ねた漁業者のくらしを写したもの
= 漁業集落の形成を経済優先の乱開発と同一視することはできない
- 歴史の事実は多様 = そのいずれにも同じように敬意が払われてしかるべき
= 単なる歴史ではなく，「歴史文化」という視点が必要

■歴史文化の継承は，今を生きる人々のため，未来を築く将来世代のために

- 歴史に学ぶ = 今の時代に生きている人々のくらしと未来，そして今後それを受け継いでいく将来世代の営みを育む知恵を汲み取るため
= 歴史の事実を無批判に受け入れることではない
自明だが，マスコミの論調や復興をめぐる混乱を見ると，社会に向けてそのことを強調する必要

■「津波てんでんこ」の現代的意味

- 釜石の防災教育における「津波てんでんこ」の理解
「大人に頼らず自分で判断して自主的に避難しよう。君たちが自分で判断して避難できるようになる

ことで、お父さんやお母さんの命も救うことができる」

◇家族愛を否定しても止めることができない「ピックアップ行動」

- 宮城県名取市における NAVI の GPS のデータが記録した避難行動
 - 地震発生直後は、海岸部から内陸に向かう車が多い
 - 20 分過ぎから海辺に向かう車が上回る
 - 結局、浸水域に入ってしまった車の数は、浸水域から脱出した車の 2 倍を超えた= 「ピックアップ行動」→親を思い子どもを思う人々の行動が犠牲者を増やした。
しかし、それは愚かな行動だと非難してもそれを止めることはできない

◇自発的避難がみんなの命を救う

- ピックアップ行動を止める鍵
 - = 「子どもたちもお年寄りも、自分の助け無しに確実に避難している。だから自分が助けに行く必要はない」という確信を持たせること
- 釜石の実践
 - 学校は、子どもが大人に頼らず自分の判断で逃げることができるように徹底して訓練
 - 家庭では普段から家族で話し合っ、それぞれの家族が地震の時にはどこに逃げるのか、学校にいたなら、家にいたなら、友達と遊んでいる時にはどうするのか決めておく
 - 一人で避難することが困難なお年寄りや障害のある人がいる時は、地域で話し合っ、援護の仕組みを作っておく
 - そして地震と津波が収まった後にみんなが落ち合う場所を決めておくお互いが話し合った通り確実に避難しているという信頼を築くことができたなら、働いていて居住地を離れている大人も自分の避難に専念できる
= 現代に生きる私たちの「津波てんでんこ」の意味

■終わりに

「災害に強いまち」を実現する上で、最優先すべきは物理的な（あるいは土木的な）安全確保ではなく、人命を守ることであり、そのためには人々の適切な避難行動を促すことです。そのために必要なことは、以下の3つである。

- ① 災害経験の伝承と蓄積、それに基づく防災教育と訓練
- ② 正確な災害情報の確実な伝達と避難誘導
- ③ 安全な避難路と避難場所の確保

そしてこの実現にとって、もっとも重要なのが、人々が心を通わせることのできるコミュニティの維持、建設である。それを最も象徴的に示したのが、阪神淡路大震災時における長田区真野地区の経験だった。住民主体のまちづくりの伝統を築いてきた同地区では、地区内十数カ所でお火したにもかかわらず、住民たちがバケツリレーで類焼を防いだ。